

K より 其の妻へ

川浪道 三

T子

今朝お前の第二の手紙を受取つた。著いた翌日に出した第一の手紙を受取つてからこの四五日お前の便りに接しなかつたが、田舎は法事などといふと大袈裟にやる習慣があるから、お前も多分その爲に忙殺されて居るのだらうと思つて居た。然し今度のお前の手紙で、お前が法事のあつた翌日、お前の亡くなつたお母さんの故郷のN町に行き、其處でY家の祖先の百五十年祭をして、八日かにまたS町に歸つて來たといふことを知つた。

『四月八日は私とエチカ（夫の愛称）が初めて會つた日でした。その紀念日に私はさうした旅をして居ました。そして東京にもおなじくこの雪と雷とがあつたやうな氣がして、あの井戸ばたのありさまと、それから雷をどんなにエチカが恐れて居るだらうといふやうなことを頻りに思つて居ました。』

こんなこともお前は書いた。實際その日はこちらでも雹が降つたり雷が鳴つたりした。そして

お前が察した通り、おれはドテラを引冠つて、机の上に俯伏しながらお前のことを思つて居た。雷が止んで來ると次第に氣が弛んで、いつの間にかうとくとして眠つてしまつた。然し間もなくおれは眼が覺めた。そして寂しい部屋の中に自分一人を見出した。縁先に出てみると、雨は止んで居るけれども、空はまだ陰氣くさく曇つて居る。前の庭に崩え出した落葉が、次第に迫つて來る夕暮の中に顛えて居るのが寂しかつた。孤獨といふ感じが泣々と胸に込み上げて來た。軽ておれは晩の御飯の仕度をする爲に勝手の方へ行つた……：

然しT子よ、おれは今自分の孤獨を、寂寥を、少しも不幸だとは思つて居ない。おれは寧ろ彼等に感謝して居る。孤獨と寂寥とは自分に多くのものを與へてくれる。勿論それに堪へることは辛い。けれどもおれはそれを忍ぶことに依つて、おれを深くし、おれを強くすることが出来る。實際おれはお前が此處を立つてからこの一週間ばかり、町には用事で唯だ一度出たきりだ。E君と時々話すほかは大抵家に一人の世界をまもつて、心の底から湧いて來る聲に耳を傾けて居る。そして自分でも不思議に思はれる程のところまで歩いて居るのに氣が付いた。そこに立つて自分を見廻すと、自分といふものが透明になつて、今までボンヤリして居た周圍がハッキリとなつて見える。そしておれはおれの中に、何とも言へない嬉しい、涙ぐみたいやうな、強い力の湧いて來るのを覺える。おれは今その力の前にひれ伏して、どうぞ見捨てゝ下さるなと言ひたいやうな氣がして居る。



もとよりおれは弱く、力が足りない。精神的にも、肉體的にもさうである。おれはおれ自身の
中に悲劇を持つて居る。おれはそれを自分に耻かしく思ふ。おれはそれを罪悪のやうな氣がして
居る。どうかしてそれを償はなければならないと思つて居る。然しさういふ自分であればこそ、
おれはおれに湧いて来たこの力が自分の爲にどんなに嬉しく思ふであらう。おれの中の悲劇の價
値を進めるのも亦この力より外にはない。弱いおれのことだ。この勇氣は、他の人に取つては何
でもないことからでも打ち碎かれるやうなことがあるかも知れない。又はおれ自身の中の疲勞に
依つて消失するやうな事があるかも知れない。事實おれは今まで度々それを経験した。恐らく今
後も度々経験することであらう。けれどもおれは今は直ぐそれを回復し得るやうな氣がして居る。
その力をつかんで居るやうな氣がして居る。そしておれはこれを孤獨と寂寥との賜だと思つて居
る。孤獨と寂寥とが機縁となつて、おれの中に眠つて居るものをおきましてくれたのである。
然しおれは境遇的に孤獨で寂寥でなければおれの生長がないといふ風には考へない。そんなこ
とは當然の十倍以上だ。けれども從來のおれの心に中には、さういふ外的條件に對する要求がか
なり強く働いて居た。その爲におれはどの位も苦しんだか知れない。そしてそれもおれの持つて
居る悲劇の一つであつた。どうかするとつまらぬことからお前と争つて、物を言はないやうな日
が續いた。何といふ馬鹿なおれだつたらう！

『場所の變更に救ひを求めて失敗らないものは一人もなかつた。救ひはこれを自己に求めなけれ
ばならぬ。』

チエホフの『決闘』の中にあるこの言葉を、おれは時々お前にさへ言つて聞かせる癖に、おれは
いつの間にかそれを忘れて旅の空のことなどを思つた。然し月末のことを思ふと、その心はいつ
も泡のやうに消えた。お前や、Y君や、S君夫婦などと、お互ひに誘ひ合つて——最初には劇し
い苛責と羞耻とを感じながら、後には夢中になつて——夜おそくまで花牌を遊ぶやうなことが多
かつたのも、矢張りその要求の一つの變形であつた。あの時分のことを思ふと、おれは本当に耻
かしい。地の中に入つても、おれの靈魂が知つて居ると思ふと、おれは自分で自分が焼かれるや
うな氣がする。

すつと前からお前の姉さんが今度の法事には歸つて来るやうにと言つて寄越した時も、おれは
お前が居なくなれば困るなと思ひながら、お前に是非行くやうにと言つた。

『行けさうもない。』

お前は顔を曇らせながら投げやるやうにその時さう言つた。おれはその言葉の調子が氣に食は
なかつた。そしてお前の感情に負けて居る状態を救はうと思つた。けれどもさういふ場合に殊に
強情や我儘といふお前の最も悪い方の性質に壓倒されるお前を困りつけて來たおれは、それを
躊躇した。またその言葉の持つて居る内容に對してはおれは自分を耻ぢた。それで黙つてしまつ
た。けれども今から思へば、それはおれのお前に對する愛が足りなかつたのだと言はなければな
らない。兎に角その時おれはどんなに苦しい工面をしてもお前を國へ歸したいと思つた。けれど
もそれはおれの本當な心持からではなかつた。矢張り唯だ遁れないやうな卑怯な心持からであつ

た。

然しさうした要求はお前自身の中にも動いて居た。二人は別々に居てうまく行く方法などを相談しはじめた。然しさういふ時は二人は一面却つて心の融和と牽引とを感じた。そしていつも物にならなかつた。その後お前が△△館の仕事を受合つて、それが家でうまく行かなかつた時、お前はそれを仕上げるには一ヶ月位ゐかるから、今度法事で國に歸つたら序でに向うに居てそれをやつて來ようかと言つた。おれはそれに同意を與へた。そしてお前が家に居て御飯摺へなどする爲に、それも幾分影響するのだらうと思つた。二月の十三日にはおれの兄さんが突然死んだといふ知らせが來た。おれは仕事の都合で直ぐに立たれなかつたので葬式の間には合はなかつた。けれどもおれはあゝした苦しい工面をして——こんなに人に迷惑をかけてまで行く必要がないと思ひながらも、おれは或る力に引きずられるやうにして——遠い九州への旅に上つた。それは勿ろんあいに兄弟の亡くなつた跡に行つて見たからだ。そしてもう六年も逢はぬ母や兄弟にも顔を合せたかつたからだ。けれどもまた自分を異つたところに置いて見たいといふ欲望もかなり手傳つて居た。おれは今心からそれが耻かしいやうな氣がする。殊に亡くなつた兄の靈に對して濟まないやうな氣がする。

『こちらの仕事の方さへ都合がよければ、居られるだけ向うへ居ていらつしやい。』

お前もおれが立つ前にそんなことを言つた。然しそれがお前の本當の心持でなかつたことは、

おれが旅先でお前の第一信を見るまでもなかつた。おれの心の中にも、急行列車が既に新橋を離

れてからまで相争うて居るものがあつた。

二週間の旅を終へておれは再び東京に歸つた。そして二日と経たないうちに、おれはおれの心のうちに、家のうちに、反逆者を見た。おれは自分と自分の家とを呪ひたひやうな氣がした。然し事實に於ておれはお前に對する愛を一層深くして居た。それだけにまたお前を憎む心も強くなつた。おれがお前に手を加へたことは曾てないことがあつた。

或る日おれは仕事の用向きで小石川にCさんを訪ねた。話のあとでCさんはおれに言つた。

『一體君達はどうするんだね。』

おれは何のことか分らなかつたので、黙つてCさんの目を見詰めて居ると、Cさんはまた言葉を次いだ。

『どつちかにきめればいゝぢやないか、別々になるならなるやうに。——實はこの間F君が来て、君達が別居するとか、T子さんがH君に馬鹿な逢ひ方をした爲めだとか、いろ／＼噂があつて居るやうに話して居たからねえ。——然し僕は別居といふことは本當でないと思つて居る。別居する位ゐなら別れてしまつた方がいゝと思ふ。』

まさか世間の噂に上つて居ようとはおれも意外だつた。然しおれは自分達よりも先きにチヤンと理由をつけて捌いて居てくれる彼等を輕蔑する前に、最初の種を播いた自分達を耻ぢた。『Aさんの家に行つた時、し子に逢つて、私にどうして丸薑なんぞに結ふのといふから、私が冗談に、今に家庭を破壊すると結はなくなるからと言つたことから傳はつたのかも知れない。』

おれが家に歸つてお前に話すと、お前はそんなことを言つた。おれはお前の不謹慎を責めた。然しおれにも責任はあると思つた。今度お前がそちらに立つたあとで、おれがCさんを訪ねると、Cさんはまたそのことを話した。

『先達でRさんに逢つたら、O子なんぞが言ひふらして歩いて居るさうだね、本當かいと言つて聞かれたので、僕は先達で君に言つたやうなことを言つて置いた。』

然しおれはもうその頃はその事を問題にして居なかつたので何んにも言はなかつた。

おれはここで二人の思想上の経過に就てちよつとふり返つて見たい、おれはお前と共に生活するやうになつてから、お前の物質的自然主義の思想にはかなり苦しめられた。その思想はお前の非宗教的な天性と最もよく抱合して、實に頑固によくそれを守持した。殊にその最も悪い方面の特質たる経験主義なところがおれに痛ましい打撃を與へた。おれはそれと戰ふ爲にどれほど自分の精力を消耗したか知れない。或る時はそれに對して絶望的な心持になつた。然し新らしい文學上の運動が次第に我々の周圍に響いて來ると、お前の心に眠つて居た靈魂は、無意識に動き出した。不安がそこを覗つてそつと歩み寄つて來た。そしてお前は苦しみ始めた。お前が殊に外出好きになつたのもその頃からであつた。おれはそれをどうかしなければならぬと思つた。然しおれにもまたその頃はハツキリして居なかつたので、力が乏しかつた。おれはまたおれのことで苦しんで居た。身體のこともあつた、暗い恐ろしい夢のうちに。そしてお前自身のうちの悲劇とおれ自身のうちの悲劇とは、前に言つたやうな二人の生活の外的現象と相即して痛ましい争鬭が續け

られた。然し兎に角おれはお前よりも一步先きに居た。おれは絶望的になりつゝもまた引返して來てお前に向つた。然しなかなかお前の中に革命は起りさうもなかつた。どうかするとおれは疲れてお前に無關心な態度を取ることがあつた。するとお前はおれを愛がないと言つて責めた。おれは自分の力の足りないのを耻ぢた。

然し最近になつて、お前はお前自身がわかつて來た。同時にそれはおれが分つて來たことであつた。矢張り暗闇はあつた。けれども和解の最初に、お前は『どんなことがあつてもエチカと前れはしない。』とおれの耳に囁くやうになつた。また自分の今までの愛し方が間違つて居たとも言つた。おれはおれの愛がお前の中に次第に生長して居るのを感じた。勤勉に働いて居るお前を見ると、『愛すべき女よ！』と心に言つて、そつと後ろから撫でやりたいやうな氣がした。そしておれはおれの中に、次第に力の湧いて來るのを覺えた。これはつい四五日前にE君から聞いたのだが、お前はおれが九州に行つたあとでE君やK子さんなどと話したとき、此頃漸くKの言ふことが分るやうになつて來たと言つたさうだね。おれはそれを聞いた時、ホントに嬉しかつた。長い苦しい戰ひの疲れが一時に癒つたやうな氣がした。

T子よ、斯うしておれはお前を理解すればするほどお前に對する愛の深く強くなつて行くのを見える。おれはそれを感謝する。なせと言つてそれは同時におれが深く強くなることだからである。愛には決して限度がない。一人の人に對しても、愛は求むれが求むるほど出て來る。一生涯かゝつても汲み盡せない。倦くといふことは耻辱だ。眞に求むることを知る人にのみ愛は常に



新たなる生命を與へるのだ。今こそおれは言ふであらう。おれは弱かつた。誤魔化した。逃げた。然し今はさうでない。おれは靈魂を獲んで居る。おれは眞理を求めて居る。おれは正面から向つて行ける。お前は今後ともおれを困らせるだらう。おれはその爲に苦しむことも多いだらう。けれども今はそれもおれに取つて神聖な食物とならなければならぬ。それがまたお前を眞に愛することである。お前はこの心持が分つてくれなければいけない。本當に分つてくれなければいけない。お前の靈魂に觸れ合はうとするおれの努力を、その願望を……

『私の心は今落ついてゐません。たゞ早く東京にかへりたくて泣きたいやうな氣持になつて居ます。さうして今晚にもいつぞかへつてしまはうかしらとうつかり思ひ立つては、丁度勘當されて居ることを思ひ出した時のやうに、情なく悲しくなつてまゐります。私はまだかへることが出来ないんですね。

『私は今あなたの手紙に對して返事をかくことが出来ない。決して避けるのぢやない、書けないのです。私はたゞすべてがゆるされてもいゝと思ふほど、さびしく悲しく、そしてエチカの傍に行きたがつて居ます。けれども私はまだかへれないでせう。かへれないでせう。』

お前はまたこんなことも書いた。それはお前が立つ前に、然し直ぐ歸りたくなるかもしだい。』と言つた時、おれが『おれも少し勉強しようと思つて居るから、いゝと言ふまでは歸つて來やいけない。』と言つたからであらう。けれどもおれは今はそんなことを思つて居ない。お前が

そちらで豫定の行動を取るであらう。

いつ歸つて來てもいゝと思つて居る。おれはその覺悟をして居る。そしておれの手はいつもお前に對つて開つて居る。お前にも家で仕事をさせることが出来ると信じて居る。然し恐らくお前は

猫のことは心配はない。おれは彼等の御飯揃へをしてやるのがさう面倒でなくなつた。外から駆け込んで来て、おれの机の傍に立止まりながら、さも不思議なものでも見るやうな眼でおれの顔を見るチヨコの頗狂な顔を見ると、ちよつと抱いてやらずには居られない。彼はおれが外から歸つて来るといつも玄關で胸に飛びあがる。扉の上なんぞに乗つて、おれの歸りを待つて居ることもある。カメのハングルな顔も今はおれに對して一種の力を持つやうになつた。

言ひ足りないがこれで筆を擱く。お前は『こんなに手紙をかくのに私の筆がにぶつたことはありません。あなたは心を包んで居るからといふやうに仰在るかもしません。仕方がありません。なせだか私は悲しい。』と言つて居る。若しこの手紙が少しでもお前のその惑ひと悲しみとを解くことが出来れば、おれは大變仕合せに思ふであらう。さやうなら。

